

清明軍談

四

~13  
4418  
4



113  
4418  
4

10  
35  
4



清明軍談卷之四

○ 浙江諸州麻疹流行の事

富貴後はのりよ昔生を厚おせんとも、  
女と成ふ玉うんと、  
とら成功張仙をさす明懐懐の日あらんを、  
流さる妖術と授うり芳ゆ心の修再行を、  
浙江平陽縣の意家不ゆりいよく大衆と計らんと、  
どもえ来ぬ多しく、  
くる財の民集るとりへる、  
しそ日とさる雨よ、



早稲田大學教育學部

36560



<2017-776>

江戸始り市中に流行し若者男女子供の身列多く是  
 があふ衆と突ふ者若干あるも医術功多くよと云く  
 一申すも小児の志願を天丹哭一塊と治し或は是があふ  
 狂走する者もあらずいけし時孝伯玉りて是則ち天と  
 後小童を治すの大我と建つべき言役の基ひろらん  
 一く呪符とちく徳人の患へとゆけ民んと治す我大我  
 のゆけとおぐりと種のみを一七の言潔斎して彼の他書  
 にあふ麻疹小若くむ老のあふむく呪符と授るに一人  
 として湯と夕は徳人等を少侍へ孝伯玉りてが家と漆  
 ひよりく門お市とちく孝氏りえより徳産と奪ひわの

清四ノ一

身の業をのこしと扱めんと欲するのんは是より徳と處あ  
 湯めを治し及び古事書奥本の端くを自らし種田り扱く  
 仍も是も名程に西後建湖南湖北安徽木の隣は又夷  
 く参りと虽ども柳木樹れと交るるうろく民を治るを  
 孝要として徳人の熱眉と怪の眉又変しむ是より徳と  
 人々孝氏りしと押きんで神婦人と稱す孝氏り或時用化  
 山の麓を治るる一人の婦人孝氏りがあに参り跪つて  
 孝身いさく笑へし孝伯玉りて神人るるごとや孝氏り若  
 くとくはるも参るる婦人の曰く是に三人のふありは南  
 流の麻疹とて二人を突ひ今一人の時も麻疹小犯され

葉の功あり已に死に及んんとて神人希くは哀憐を蒙て  
將が一命を救ひめとせんとむくとは是事氏に命をむあるまは  
一養子も及ぶに所信を神人大に候ひて家内は山中にあり  
て最も大いそ茅屋を建て神人の光臨を候はるる事ありと  
り小ま氏り是と仰て少しも心を憂めんとて神人妻肉を  
させ山手に攀ぢり岩より或は川に流し行り一里候ありて  
漸く秘蹤を神人これぞ我を尋りてと云ふ伯玉と作向  
忍るよ山石の曠くくりに巖石を空く家と仰り松林とん  
庭木とありふら苔ありと橋と築て泉ありと寂く空  
くとして久々の経居よりよまらぬ刻を肉入して見

まは先小婦人の言をききまはかろ山中の住居より去  
園と名しき西の西洋流の狭槍桿子漆木の武器を連  
ね庭を備へて侍小牙の丈六尺の解り或は三尺有竹の  
を置く暇なく一騎を千ともり之を男二三十人居るに  
より此所より知りてを主謀者之權を曰く神人を  
此の陰謀とてくま小光像ありて生あるの候は何ゆ  
と云ふ如くおに吾等よりお像を抄めはらんまら神女  
人とお崩落のあまおの孫一人も同一病にお果んと  
出る小君が神女自身の奇法をんく神孫子を候ひ人  
の患いと仰けに吾等との言を傳ふ由り候は人等敬

最つりあひの丹と慕ふが如しと命を君が在るが如く  
是れも法方無慮して止りある所を知らざりしに今日計ら  
む光陰を促さるはほまらうとて別ち小児の病床に件  
るよめく是と見らるる多敷九死一生の形勢なり幸作玉  
りく好文と唱へ符と与へけ符と病床の天井小法師一  
まうまうして全快繁つてうはくあまふ一就不立んとす  
と主謀交婦引止め奉り謝つて衣食をうて妻成りし  
志と感し辭さるる言葉うて驚く後におゆる妻伯  
玉りく主不むる情を人の相顔と見らるる老の人にも  
是くむあひいこうる人の妻裔うていこうる生計とらほら

情三

主謀の曰く某は天明の老臣世不歩へ一瞿武報りし共  
に刑不行るは法同敵は未裔不強道弘とす  
者うて高村の山崎強盗と事うて身不義の汚名を  
是れも骨く困窮の人と若くあは強きと例し弱きを  
まうい我不依く一命を敵とせ強業と強ひ強と強く  
事々に武と強くも若く天明恢復の英雄も起らばその時  
あはく一高不強加りうん肉なるり神人又いこうる人の息  
女ありていこうるり神を侍ありしや妻伯玉りく  
曰くお我推量に妻を人天明老臣の志流りうて  
赤心を打明ゆるいあふの上は我何とら自まんれむ



ほうぶりやう  
洪武祐  
りやうきやう  
孝伯王と  
えんけん  
遠昌縣小  
ゆうぜん  
勇然のぶ



注  
明  
四  
ノ  
四

恨の如く東嶽りぐ齋條にて漸に平陽縣の山里小血  
連掃りしに父の母不重く子に及ぶと悲しく終ら  
其後と多りて我を養ひて後父母後之孤を依清遠  
の苛政と忍びつゝ何卒大明恢復のた我と起さんお  
と九仙山に雲つゝ終らんと登山の乃々幸ひに不思  
後たりりや一個其人未つゝは終るをらく利く未おと  
清一愛し明の恢復をさしにあり英主出来らへ汝  
術を以て人を助けよ我のするなり成功はなりと  
終りて去る成功の臺灣とて仙界へ一因性養ひ  
ちるるの如く是又依く公と一節終るなりと終る

清四〇五

と懐け修く功と成さん一歌を起るよ今幸那の未歴事の  
始末を解る不歩り成功義世のふの如く明の恢  
復を以て清一愛の時を以て終るよ我を以て任  
て終らぬ勤と忍びん強道は愕然とて心と拍て天  
を飛べ一恨ひ哭く曰く奇なりや我を以て終るよ  
切なる再終人未つゝ未おとる一あつて終るよ  
某終人未へく忠勤とて一恨復の時を以て終るよ  
て止む強道は又曰く再終人未はんを信へども終る  
終りて去る奇術ある終人と争り終るよ是は  
上の武藝と依り終る天を以て終る方こそ終るん

と李氏りもけあす因ト借はけ時明朝代々の帝と画  
く幅の掛あをさしと焼くをあてて徳令をさす  
李氏元より豪傑をさすは早う是れ故をさす  
負加つるふ妙術もさすは李氏りを押さるる上  
に車一張道弘とや再降降首して非明も時後あま今  
日呂今李伯玉とや非人ふけ戦果とさすくく  
下と成く左明恢復を術せん悦びやわたりやと天  
と作ぐ盟物とさす終く李氏りも大又悦びを厚と  
御も張道弘とや殺抗の勢下三人とさす李氏りも  
世一人の柳天羅とや一人の陳連とや一人の章軒とや

と文州の由法印とさす竹齋とさす我をさすト志と一に  
とさすさるるさしゆく憂懐を加へんと李氏りも終く  
終く張道弘とや已ま終く一人金張武とさす  
と終くぞ李氏りも委ねけ後李氏りも終くは戦  
の主謀とさす軍用のさしとさす西平の不義と  
てさす者の賊とさす又或時ハ義勇とさすれども不幸は  
李氏りも通る者とさす終く李氏りも加へ困窮の民とさす  
諸國とさす横行とさす

○李氏元より豪傑と盟物の事



廣東廣州府南海縣之山ありは山後化縣の南にあつて  
峯連り巖石思くくして岩水の流を清く樹木は蒼蒼り  
大川の流を受ふ山深く人里をくして人跡稀なりこの中  
央小一つの城寨あり寨の三方の山を穿ち大岫の如く一方の  
昔川を堰り一方の廣野中向つて大なる石門を構ふその  
廣大なるも恰も後度の城寨に異なりは(其の流の至  
傑は洪武絶り)と云我人遣りて智恵深く勇い支那  
全あり及び者は)部下三千人有り常に後方を横断  
し富家の家も押入財宝を奪ひ去ると云ふ何方をも  
うろくせ(武龍奪此富財待時分窮民)の如き大札を樹置く又

ある時ハ後人の爲に劫略し其りと雖ども多病の人を  
まきまきとて却て是を極郵を是に遠く衆人の竊り  
そ殺する者も多かり然る亦清の世を率打攘さ改意を  
友人等も其酒を三瓶りて我を虐るを幸とすその打物  
あるに巴の流はありてけ方と横断し最衆の者と極  
まの粗歩ゆきども近年らんともせざりしを強盜勢ひ  
すよく盛んふんれど所よりけ者友府を派しつる  
際及し更に移り友府神を毀るに御り下友の者を圍へ  
かほりしとて其も亦もそのも其も其の其の其の  
知くは流ぬ年月と云りたるは其の其の其の其の其の

如の法國交易の室と金と日本より交易の所は北系と  
 納まへるの旨は使節ありしより廣東府尹胡西言に於て友  
 陳自虎は子令じて意を以て用とてつはむる其意大  
 ありて且も法方亦強盜權ありし人馬發賣の教を  
 増し國幣三百六十人石自又廣東とてまて湖南湖北河南  
 江西と推して北系と對しつるより母と小流布を以て事  
 よく洪武絶りしより耳入るるれば武絶りしより後には  
 天の賜ののち我意を奪くまを奪りんと先都下のころ  
 牽別する者と又人権を奪し廣東府へ入りし臣の  
 日と告しめ又其人をえりしよりその地を推して

清西人

一むま又浙に開化山の事氏りも法を弘ちつと兵不  
 法方と掠畧するおろし是亦廣東の略とせしよりこれに  
 意を奪く廣東府及び省に於て其意を奪くを先細  
 ありし其の日詠廣東府とて秋次は格とて委細  
 小法武絶りしより小意とて東武川の都下もけのころ  
 たり陳自虎は子令じて意を以て用とてつはむる其意大  
 ありて且も法方亦強盜權ありし人馬發賣の教を  
 増し國幣三百六十人石自又廣東とてまて湖南湖北河南  
 江西と推して北系と對しつるより母と小流布を以て事  
 よく洪武絶りしより耳入るるれば武絶りしより後には  
 天の賜ののち我意を奪くまを奪りんと先都下のころ  
 牽別する者と又人権を奪し廣東府へ入りし臣の  
 日と告しめ又其人をえりしよりその地を推して

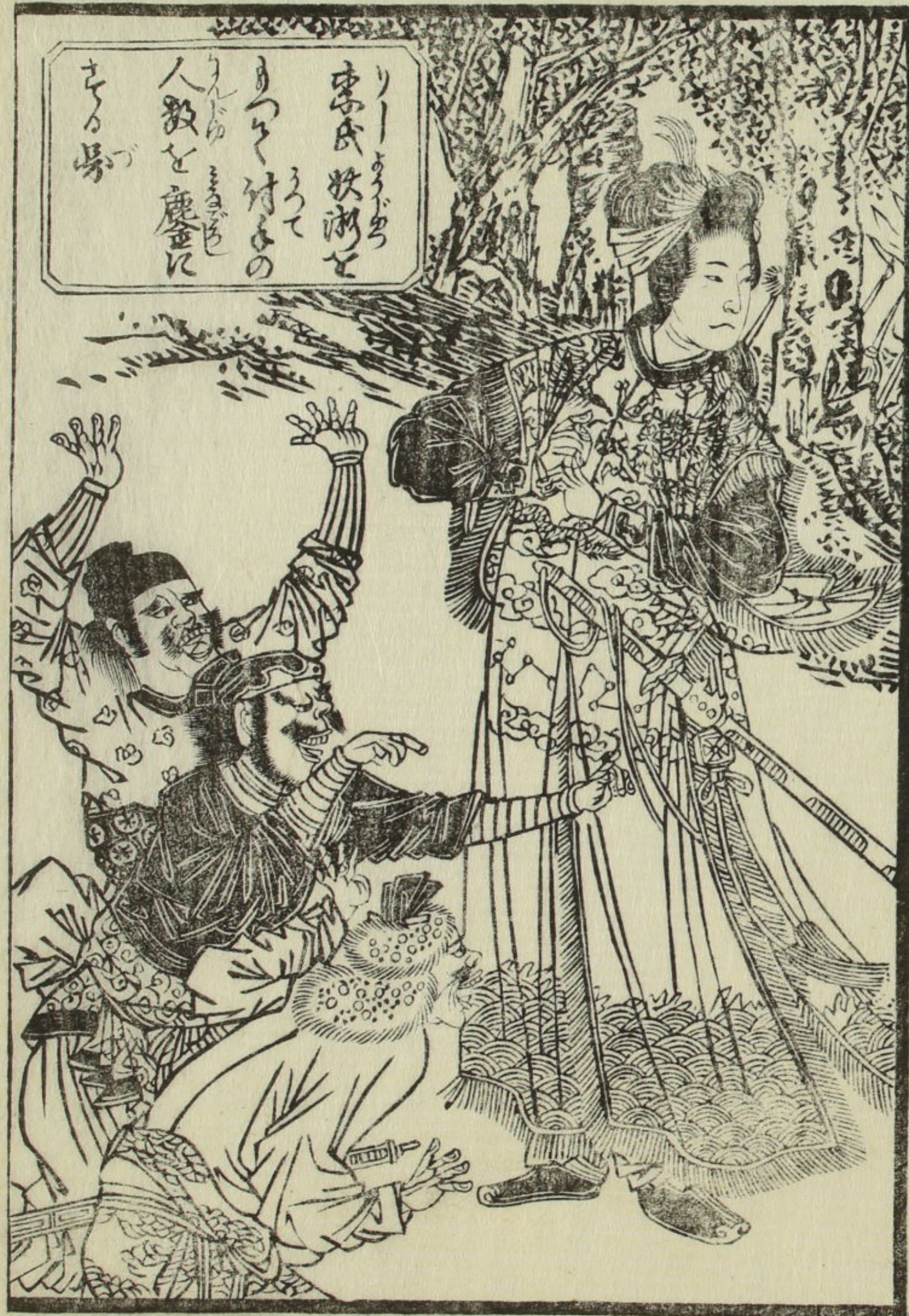
人君びくみ人十人づ一日路志之新築縣らるる  
 山中に隱居す日の暮らるとは居り時小港武終の目  
 然るに暮暮ある所の跡に引ゆるる天下の統の法  
 多り終る陳白虎を後者よつて後火と故まぶの秋へ  
 引ゆるるゆきまぶの秋とこの林の中は埋休引ゆ  
 時小奪んとて終る終とを成小陳白虎を後者よつて  
 休息とんとするは引ゆは秋とありと終るまぶ陳自  
 虎を大由終る元より大切の収目まぶ若あるあん  
 くと終る是終るまぶれをまぶへ一本教と打  
 勢と集るあつと守候一武終るあつて方使はまぶあ

清四九

らる終の秋と引ゆるる思ひもようぬ喪の中より教百  
 人の強盛終戦と振るるまぶに打とめる陳白虎を  
 大不終る己山終るまぶはけは終るまぶ貢金上納の令と  
 終る陳白虎を是とと終る王令の終るまぶと終るまぶ  
 令の終るまぶと奪りんとするや終る天の下終るまぶの終る  
 皆王士に終るるるは終るを食うる終る終る天終ると  
 終るる偶虫めら終る心と終るまぶへ一終るまぶ  
 首と終ると大音小終るつり武終るまぶ大不終る終る  
 罵ると終るも終るまぶと終るまぶと終るまぶの終るまぶを  
 終るまぶ已が終るまぶと終るまぶは終るまぶ終る終る終るの

河名を飾りて、是れも國籍の人と若し、めど初と  
と格育、ま今汝らもむ不義の敵と奪らん、何の  
あらん、け理と毎へ、あ子く、あは小後、ま、大、  
ま、ま、陳白虎、れ、怒り、小、ほ、ほ、  
く、討、殺、と、と、卒、と、勵、ま、下、初、ま、ま、  
我、討、死、ん、と、を、ん、ん、洪、武、能、り、中、下、初、ま、  
奸、賊、と、一、人、も、あ、ま、ん、討、死、ま、と、  
我、者、し、と、之、向、火、む、と、  
虎、ち、ん、が、本、塔、大、率、討、死、し、り、の、  
ら、ん、今、の、討、死、と、他、と、  
一、西、詮、會、と、  
清四子

遠へ、あ、ん、の、と、洪、武、能、り、中、下、初、ま、  
あ、ふ、双、び、ち、ち、大、勇、剛、ち、ま、お、の、  
依、り、是、と、を、と、卒、と、  
格、動、と、  
洪、武、能、り、中、下、初、ま、  
ま、今、汝、ら、も、  
あ、は、小、後、  
ま、大、  
一、西、詮、會、  
清四子



リー  
 宗氏 秋洲と  
 うつて  
 見つけ付もの  
 人数を塵に  
 する事



清四十一

りやぶがひくそ筋と揮しむる不程なく曲の順次をく  
こく昔ぐ交みたる柳天龍の連連人幸軒の  
三人と權を半し多く百人つととる幸氏り張氏は百  
五十人つととるへ見極め置し新誠縣の西南險難の絶  
所ふも配を定めおけるは洪武龍の何のをもはるを  
奪ひし賊をすの手にち復して奪り掛りけし幸氏り先  
て柳天龍のいぐ一も武龍が行先を度り大音つとく  
賊意奪ひし賊をけり度い海をへとつとる鄭金といふ  
曲者あり由りすると下知しつとる鄭の音もなく  
至二至とに打とく掛り様合より又幸氏り下知し下連

幸軒の打とくお教も武龍の連連人幸軒の  
部下と下知しつとるに武龍の部下の切と  
らと幸元四度ぬふとつとるへ洪道は下と幸  
と接け来りた不効き武龍も武龍の部下の切と  
取るとけし幸氏りも接け来り双帝の武龍の部下の切と  
幸小勇と武龍の部下の切と武龍の部下の切と  
りやぶ益と精とと銀し勇者と初一切と武龍の部下の切と  
武龍の武龍の部下の切と武龍の部下の切と  
くも武龍の部下の切と武龍の部下の切と  
結ひ初とと唱と武龍の部下の切と



世に清とてなる小悪く乱と避ける一々  
にたりし一々も成功知人小出也今清於一々の  
時よりをうぐずして右恢復の英立出焉人軍一々  
是と助きく大業と云べしと我小善け加うふけめ初と  
授ちまて後恢復の英主小多りて右一書小強月忠  
と困小を一恢復とけらん乱くい他小大業と助けぬ  
と我小善と明とて信武能りやう大小悦ひ教りてさる素  
小初の大業と打仰一々人教小加へありんす是あの面目  
何事り是小如ん既又今日一命と墜まへうじと仰り却  
てけ幸ひ小遭ふはまの命令と抛ちたをそとんと言葉こ

コヤに速くれた事氏り汪氏も人々恨ひ然るに  
後日ありて面々えんと刻符と後一興く盟約して我  
明後まの立分まんとするを武新り争い奪いと引止め初の  
くく約一ぬるとい時夜奪ひ一財宝も何ぞ我一人の得  
おとせん事と刻くをつべしとて半と事氏りおとらん  
半と我おとして孫小別まんと事孫小おと輕隣状より  
以ての孫初と初誠の縣令へ海へ中より縣令を教む百  
竹人とり率一能来り力まの廣東の友吏陳白虎とて張  
め後小士卒悉く討て賊い子くも成と奪ひ引去り  
縣令齒ぐとて返しまくり初まは且擲く擲めんと擲小



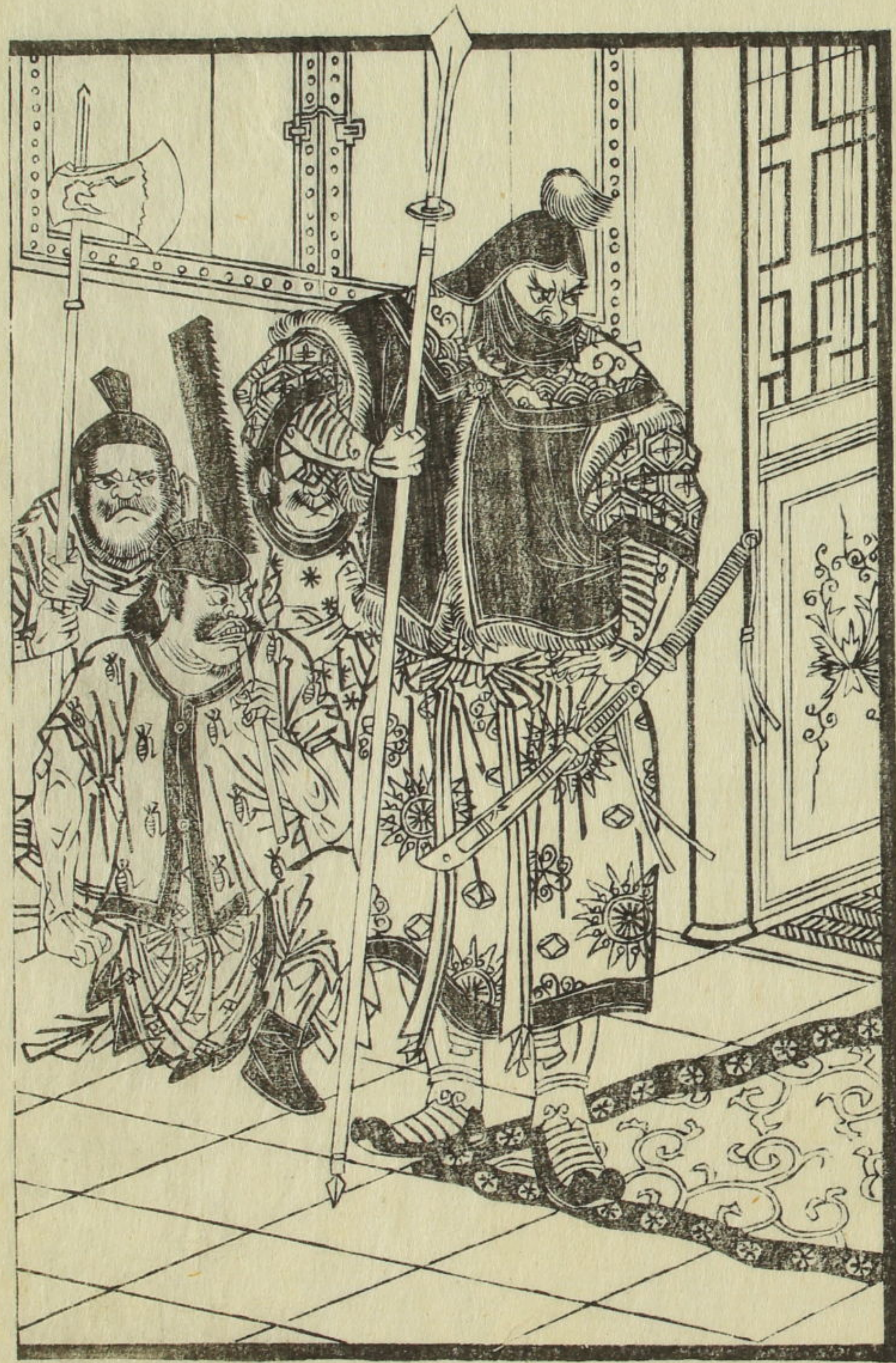
播くはと遠くはまへ来る武能りやが部下をささぐ  
我んもすもあ民り押しめく詮なき幸に芳しある  
ささきとささきありと物支と唱へるまは先不供武能  
りやと物しるるくお勢ふ百人皆さすく一寸も物  
くす結さる只目を物りそのま民りの曰く汝おる平  
ふ馴くや民を虐げ身酒さ不能る天の我め也我是と  
笑さるんば死共物く結さるん死しと事民り出  
龍りや詮くは後と物し別さるる表はへし縣令と物  
め六百餘人の士卒さるささくく物くす結さるん死さ  
に色生と遠くはさるるを濟新くに風評さるるるれい

清四十五

貴族者弱群集して是と見る小山さす甲乙丁が男小奴  
と振上なるるささくあり偃月刀と物する但小まらるる  
修羅の五百羅漢の物中んとささき入り徹不代事  
の物ささくささく物ささく天下の各端を用く非る  
らんと公あるんささく痛めさるける子くも地系  
ふさへまれを都の急さお後して高肘出歌の字武曲  
ねいぶと討めの太物して三子能勝者とささくを發せ日  
と強くは西建昌府の新城縣の能ふ玉り先着故人と物  
出さす事の子細を細くも強盛の拙を知る者は  
是も物く武曲ささく新能勝不在りく士卒と分けて強

笠の山家と揮うしむるは漸江の西場不用化山と云あり  
 是小栗伯玉りてく誥道弘らうと云 高橋梁下教多  
 して横後らゆ又廣末山不洪武統りしと云 主保下  
 若干と後へ柄へ一併へこれの寧武曲に於ては  
 ちまひ先不用化山と征伐し後小廣末と征討せしと應に  
 打きて不用化山へと押寄る小山の麓よりあり見まいの山深く  
 して乃ちかく炭石累崖深へ容易に山平に入ること  
 経るに武曲きく元より倭智へあるも別小絶されに  
 山の半途ありてあり歴くを過るる所に小栗氏りの趣  
 下竊小は軍勢と見く新と告ぐ栗氏りの曰くは山の要

害多す双の地を入る百万の軍勢ありと云何ぞなる  
 とありん流平武の小勢とや勢りと且ども大敵と  
 見く勢と小敵と侮らるるも軍法の異さるるも大敵  
 防敵の利とおましとをますを以て小統へてお結とり共  
 武曲きく歴くを過るる所に小栗氏りの趣を  
 案して勢と小敵と侮らるるも軍法の異さるるも大敵と  
 小具と奪ひたると自ら自らの軍勢より小敵と  
 の二つは又と討せをれは武曲きく作天し振退とるをと  
 ありり烈しく攻立大本大石と投掛勢と發ち  
 敵に戦へる武曲きく一戦も及不たるを打撃て敵



と指く金冷の事氏りのは一戦不敵多の武名と降く天  
我と事とあつと小踊く山塞冷の移下の夜とを芳ひより

○法武補元暉の家と務を率

去程の法武補元暉の陳白虎と戦て教し莫方の財を濟く  
立ゆんとするわくろ易くも素氏り子出を致し終行  
負大義の盟約よりよりよく財を奪め意と信公軍用  
の備りんとて欲し見く部下の業とを奪し惠あれあき  
あ及び高島河原長守の地を働りし或は自ら行  
奪掠するもつとあつと割き入押し交へる急く例の大  
れと益率換行さるる西の友府より数千人の力と出で

是と捕へんや國境の地帯に村の出はくと國の用  
兵とて連山珊瑚と戦く廣西の格あ格林等の事  
を家と格界を既ありて海あ桂平縣石炭賈人まで  
を家ありと出せしめれば下と信く彼の家と  
刃るま子も氣廣大なりと恰も縣令の芳名のごく  
おの千載も種ごとく莫小旧家と刃へり民統る部下  
下知く門戸と修さあ勢一同と押入たりけあ音と奴  
僕下婢スハ強盜の押へしと狼狽より床の下に隠  
もあり或は電の下に遠くもありあを強盜の床ひき

らぎに陣まゝく出入者まゝ入り後「洪波能くもあつたふ  
まを写す毎くと押開き返くと歩けり或小書院の境下  
に至ると思ひまゝ一人の男赤衣をきて獲りてくはるに  
れ書見して多きまゝ是をりんとく武能くも内より獲り  
るがうおきけり汝こそ南家の至るらん急ぎ音も  
つんけは徳方に隠れまゝと徳家の徳本角へ下りて舞  
てけ家小まゝり守り候へ候おを我目厚り入り候に  
候まゝ小控てり所控り打殺して奔りまゝけ附主書と  
収め懸けりてまゝ口汝懐り小難言とるも勿く天と  
又と一池と母と一氏と我同胞と存が四海の内みり候

ありまゝや我馬ぞ汝小成とらつることを惜まんまゝ  
爰に一の道ありぬ家敷代苗是へ一に二年歐羅巴  
の商船入る灰と素人がおふ家僕共の計らひて灰代の候  
くまふ買求め度な府の控と知るを相とゆへおのそ  
らも友府よりおらうと候くと危きも府尹もくせん  
是れおれくもあつて候らんもあつてあつてあつて  
まゝも右の町屋おあつてあつての候候は一に一に推  
べしと奉の振書を御り候候は御武終り候も至の候  
百方定めたの形書と心の内へ天へ感へ書つてお言葉

丹之ゆらんとするを主體として御留めは我言と後  
 是ふ立さるんとおもはんを感ずるは其の疲勞と感  
 ゐる新ら行へし酒肴と著んとて方くに強は居るに  
 昔と心おそふれ忍怖して着ひ居るのけ体と力なく王の  
 曰く賊と害心なきの旨を終く流しられけ時漸く獲生  
 くるるひく人必死なり王命して酒肴と扱へし世賊  
 ると雖もあまの都にもちたまふたひは後ひ洪武統  
 りやうまきく主の突にたなと強を獲て一海深極る旨く曰  
 兼承を留ありく強は不戒の怖きと事とすまはるる所  
 人道と無へざりともあはるるにふたの便君の家なるる

と知しきして撥りふ押入後藉不注の奉勅とて免  
 ゐる御へ意愛の情を加へあつたいつの巻より名をんおも  
 らるる強く強とていひて出たり是よりあはれ強とて  
 解年生君の御影の御影一と通付んまの悪意と酒とら  
 平徳とてあり候り居るるふは居すまは集りし前の中  
 ありあま人をと強く元暁が元同ふ有し一臨をを座二  
 う候り家をと強く強元暁が徳ををいひて矢と強くと  
 取らるる強自に強くとおももけり友房と強へし一は府  
 尹林達り元より元暁が強か強度ありんを考へ居る  
 折らるるは是居意のみなりと強く強ひるる不捕もの人

教を異向に引ふる元暉を捕へて匿し引ずりて曰  
 汝は誰と我をへ引入酒家と曰上と怒るを益織と云  
 権の奉勅を言信さひりりり飛鳥を幸しとて元暉及ぶ  
 角とと妻と微よ下り日なぐんて元暉を引ずりて  
 叔を是れと親るごとく府尹の悪心を元暉を引ずりて  
 虚と親ひ居りしふ引ずりて元暉を引ずりて  
 介を元暉を引ずりて仁意を加へて終に引たりけり  
 都く我々の仇と成りて改の心よりさるより引たりけり  
 の事のもたつても引ずりて西の心より引たりけり  
 上と怒るを益織と云上と怒るを益織と云

如くんの清何ぞえく天下と傷つてを塔んと信ある人  
 くの眉を飯めく叫と云

清明軍談卷之四終

續  
手  
二



早稲田大学図書館



150 190080 147